

百四

難波橋北詰西にて近年より涼みあり名月のころまでも毎夕賑はしく此岸へわけて河水清流にして眼前に數艘の舟數品の花火へ天に登り地水をくぐりたく人のたのしみたかぬ人へなをたのしみつきぬ一興天満宮の祭禮に随一の拜見所なり茶店に餅茶麥茶はつたい茶豆茶煎茶山吹茶やうのものを夫々のこのみに應すあんまとりへ涼みながら自由なり其外商ひ店年々増長して涼む人も羣集せり

百五

同橋の中ほとより西北の方の山の間に有馬の富士山見ゆるこなたの大川にへ田子のうら川あり東はるかに三保の松原と思ひ山のかたちへまことのふじ山にすこし似たか三なすびのはつものへ市場に高下をあらそひ雪へふりつゝの言の葉もきかねば夢に見たといふ咄も志らず只所ひいきして

東路の名に大川のなにははしあれくむかふにありまふし山

百六

北野長池藤井寺の釣鐘堂へ土ぬりにてめつらしく

人ことにあらめつらしやあらかね堂つちてぬつたりこれもとうせい

百七

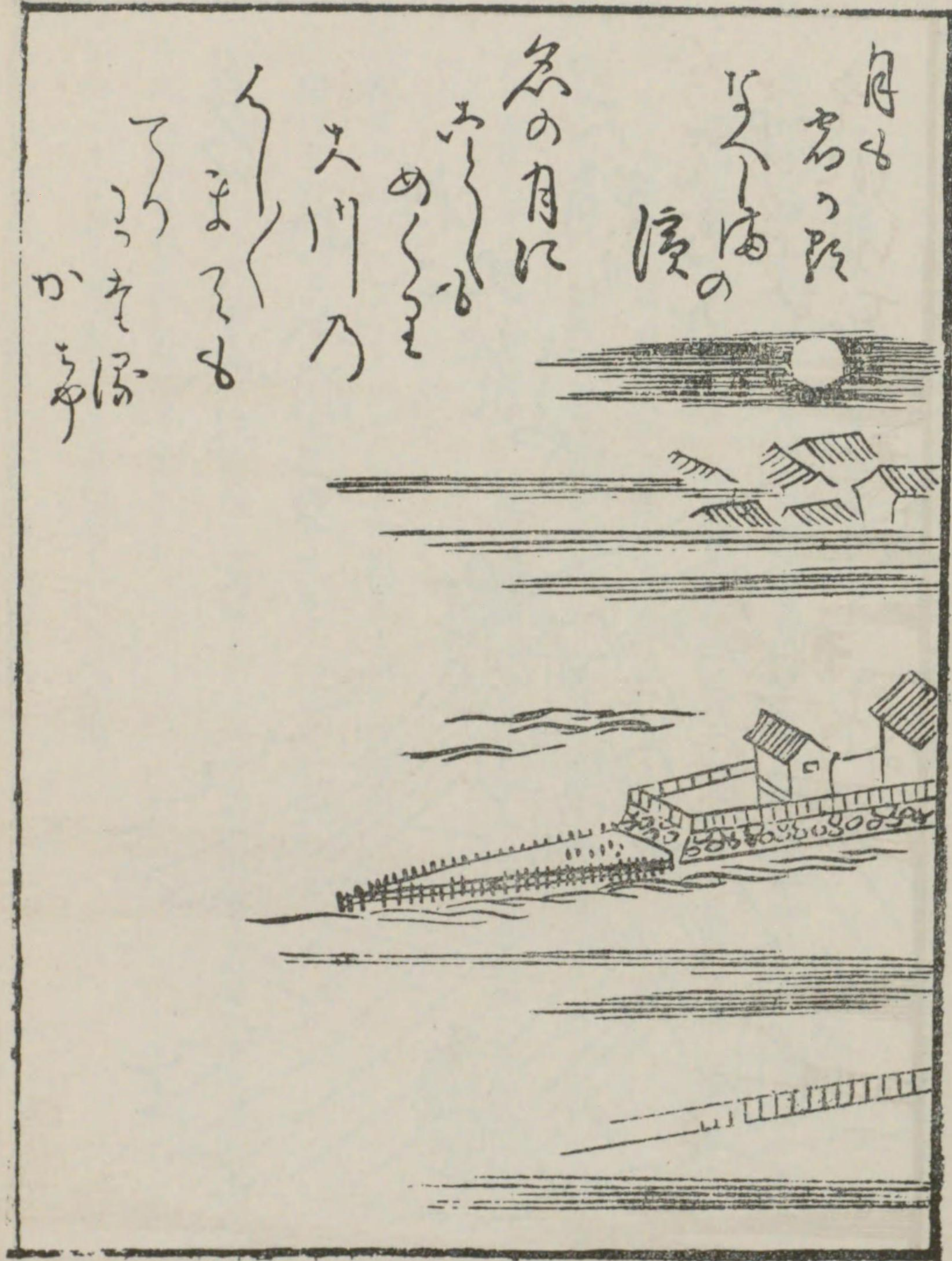
露の天神宮へ世におはつ天神と申御社内萩の盛りのころ

咲匂ふ萩の葉ことのえら玉や自由自在なつゆの天しん

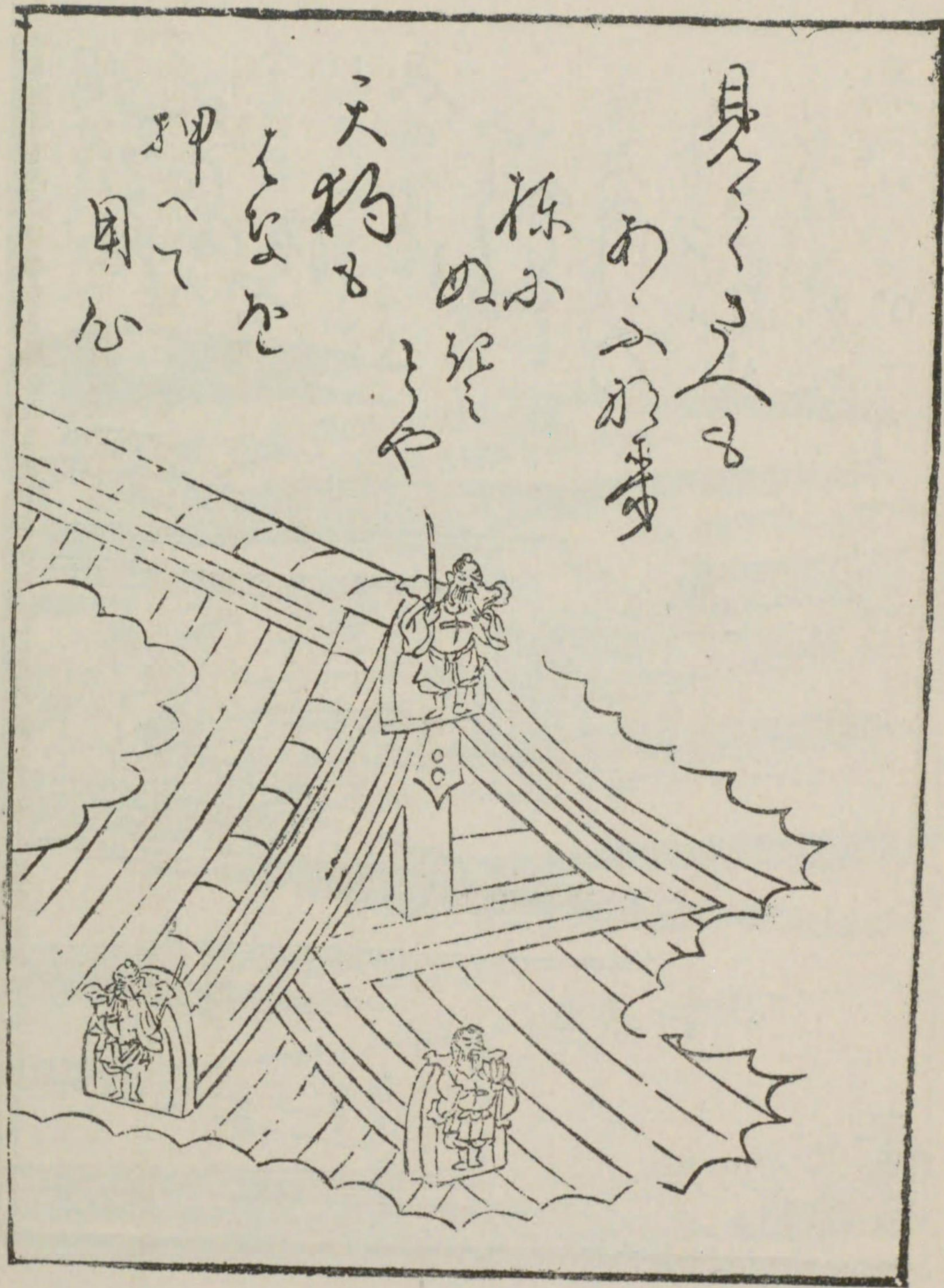
百八

不動寺本堂の瓦に四天王のぬき身してゐる又天狗が鼻おさへるる瓦もありはなはたおかし、









百九

大融寺地内に見事なる藤のたなありさかりのころハ羣をなす由縁齋翁の哥に「鹽かまのむかしの春にかへるかとなかめてとほる寺の藤なミ

百十

地内今の庚申堂に誹諧の五萬句の勝句五百番の繪馬浪花の點者鹿嶋白羽翁評なり堂の家根の兩方へ繪馬の端出て長サ凡八九間もあり奉納願主津田氏延女とあり是より世に五萬翁白羽と呼ぶ

五萬句のくふうめくらし長々となかき繪馬をはかけたてまつる

百十一

同寺にて那知山の開帳のおり時鳥を見せけるに毎日の數聲に昔ハ聞にきたの、ほと、きすの一聲さへきかまほしきとよミしも聲聞さへ稀なれハかたちを見る事ハ及さる昔を思ひ見る人聞人日にまさりけれハ

澤山にない靈寶やほと、きすきかせにきたかき、にきた野かたま、に聞にきたの、よけれともほと、きすや見てそかしまし

百十二

常安寺の地内に年ふりし古木の紅梅あり梅塚といふなり北野天滿宮の御神木なり當御社内に往昔一夜の内に松七本生ひ出し古木今に青々たり

色と香につれてきた野の常安寺こと葉の花も、に梅塚

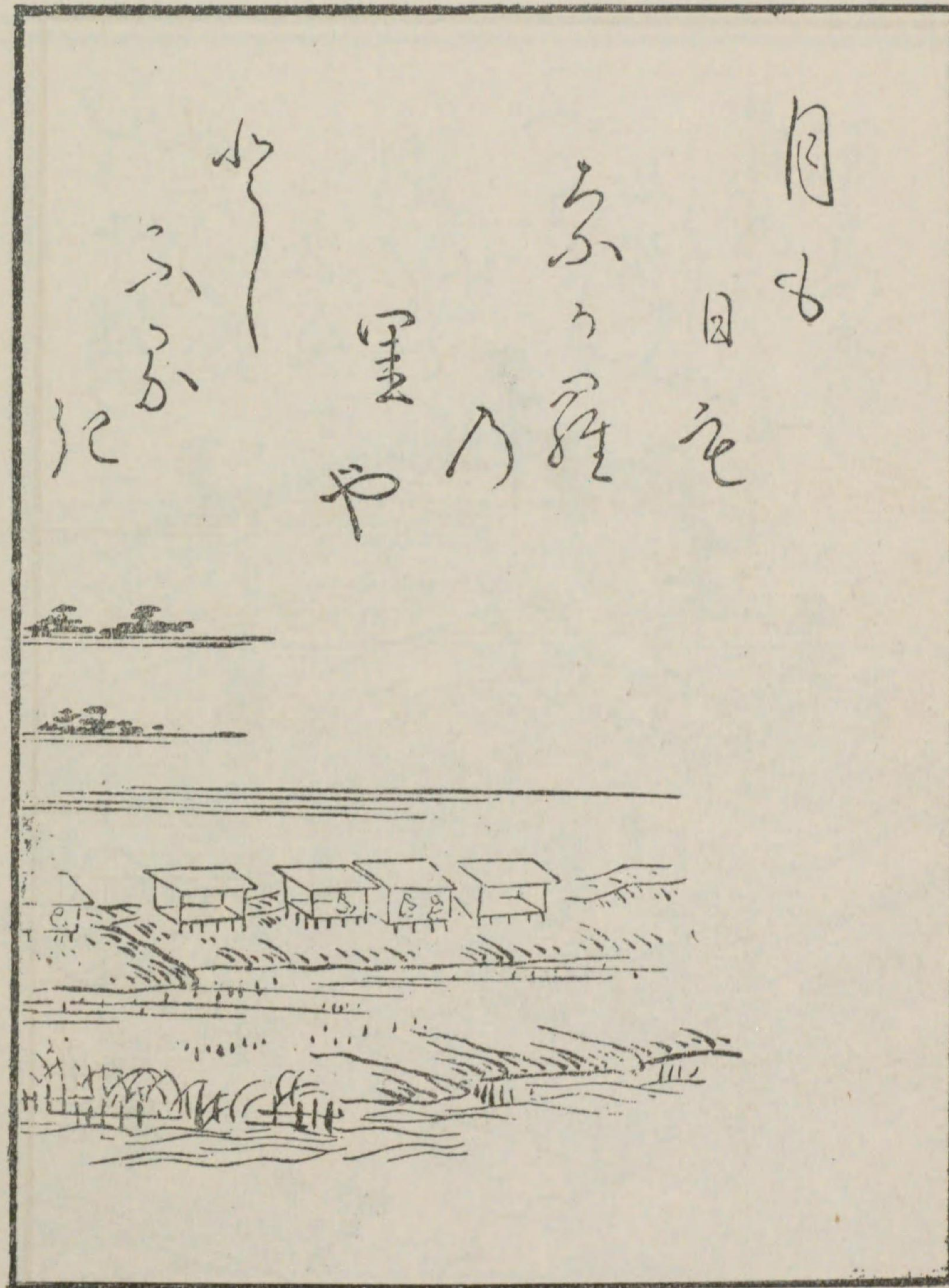
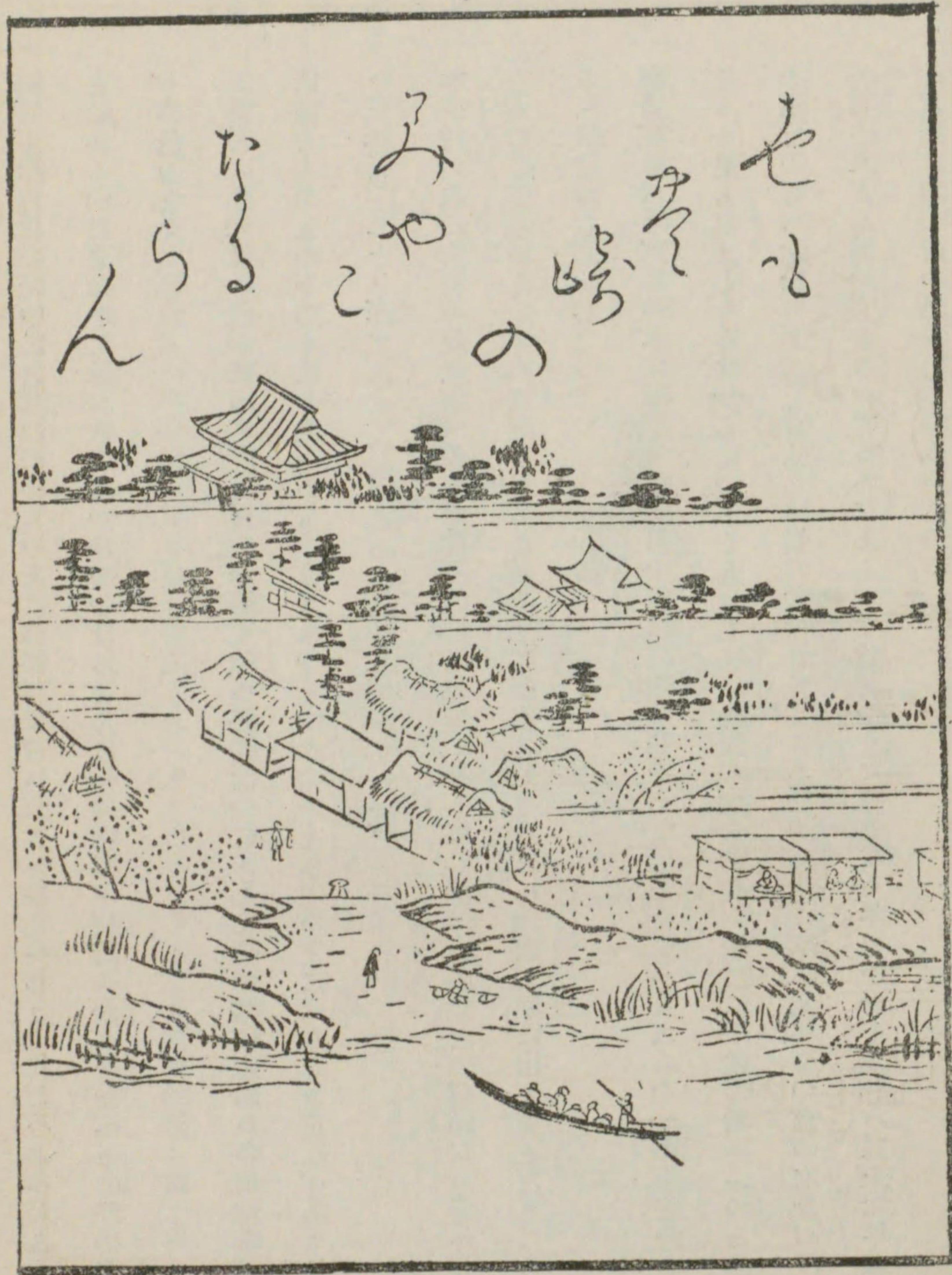
百十三

同御社内少北植木屋の牡丹の花ハ年毎に遠近の遊人羣をなす











百十四 同二丁餘り北の野中に古木の松ありもとに小祠有て昔ハ此所へ參詣多しとそ其ころよみ人志らす「千とせふる松に壽命をことふきてねかひをかけるこんけんの宮年々枝葉さかへ十かへりの花の春へみとの色をます

百十五 三番村の東光院の庭の萩ハ名所の數種を植て秋ハ見物おひた、しく花の紫に朱ぬりの辨當をひらき置露ほどもまぬ下戸も萩の色をあらそひよれつもつれついと萩のいとまほらしき花にぞありける  
名にめて、三番さうてう來てみれハ鈴とあさむく萩のうハ露

百十六 本庄村の森に宮あり此社地ハ孝徳帝難波の長柄豊崎に都を移し給ふとの皇居の舊跡なり近年此宮居の左右に紅葉を植るながめ遠近よりあゆミをはこび來る輩多く或ハ北なる堤に出て童ともうきを忘る、榮花ならんかし

百十七 南長柄村八幡宮の神木に延享元年五月中旬に鶴鶴の子をそたてるをよみ人志らす「鶴もすをかけすハこども見られまし今もならにつ、く人はし又一吹風も納る御代の松枝に千代の數そふつるのミと子兩首の哥ハ此松の下にて實弘し繪圖の歌なり又其ころはやり哥に延享元年さつきななかバ津の國ながらの八まん鶴かすごもりするふなまんちう此哥をうたひしなり年月をかぞふれば五十六年餘になる此宮居に詣て昔を思ひ出しつるのまつに



百十八 同鶴の八幡宮につ、き鶴満寺といふ近代造立の寺あり天台宗にて江州坂本西教寺末寺なり鶴満寺ハ鶴の巢籠より前年に此所へ地を定め則寺號も鶴満寺といふハ古名なりとぞ其後八幡宮へ鶴か巢をくミしなり全く寺號によりて鶴の來りしか前評とやいはん又寺内の堂の彫物に猿が鉦をはり念佛申所あり是ハ本寺の西教寺に昔念佛退轉せしかハさるあまた來りて鉦をはり念佛申ていをなせしより古例により



ての彫物なり當寺つりかねへ長門の浦にて引上し鐘にて銘へ天平とやらかすかに見ゆるよし其後引上しへ四百餘年になるとぞ其時の銘ありかたちへ尾上のかねのことくにてはるかにちいさしとぞなからへひなからの里に年ふりし千とせの松に鶴みつる寺

百十九

野田村藤菴へ豊臣公御遊覽の節曾路利も御供仕來りしとや當所の藤の花へ往昔より都の高雄の紅葉にならぶ名花なり今に至るまでさかりのころへ見物羣をなす津の國擣衣の玉川といふも此地内にあり  
—松風の音たに秋へさひしきに衣うつなり玉川の里とよめる古歌も當所のことなり

百廿

浦江村了徳院地内の杜若へむらさきに白をまじへ池中に花のいろをあらそふなかめのつきぬたのしみなり

紫に白のうら江のかきつはた花のすかたも水きのかたつ

百廿一

小曾根村涉場より北の堤の竝松の中に大蜘蛛の松とて大木あり此古木の松より西の方天竺川の松へ昔大くも巢をかけ鳥けだ物を取喰ひ往來の人にさまたけをなすにより是を退治して後より今に至るまで大くもの松といふとぞ

目をむいてとり喰ふとも人にあへ、なんのくもなしくもの松かえ

百廿二

攝北池田の山に釣鐘火とて文月の火を燈す事京の大文字火のごとし昔此邊りの富家に老母一人住て平



海士乙女行て  
あまのついで  
むらさき  
玉川ののり  
白糸斎梅好  
わらわつて人の  
こころを  
むらさき  
今ごころの  
おと内なる浪  
玉珠斎梅好



生申やういわれ過行し跡にて残りし金銀を以て毎年七月十六夜に釣鐘のかたちに出へ火をてらし給へ  
れとねんころに頼過行し其詞に随ひとふらひのため昔へ毎年執行ありしも年ふりて今へ豊作の年山へ  
火をてらす此夜ハ三四里も外より見るに誠の釣鐘のことしとぞ

今の代ものりの縁をいつりかね火をてらすハ彌陀の光りなるらん

百廿三 上福島正福寺地内の石はしハ岡橋春曙橋の二名あり

心なき人もこころをおか橋やわたりて見れハ春のあけぼの

百廿四 同揜地内にかさゝきの森といふあり

百廿五 元禄年中義心天野屋何某の古跡とかや

かさゝきの森の松かへ幾千代も天の川にそのこる大ほし

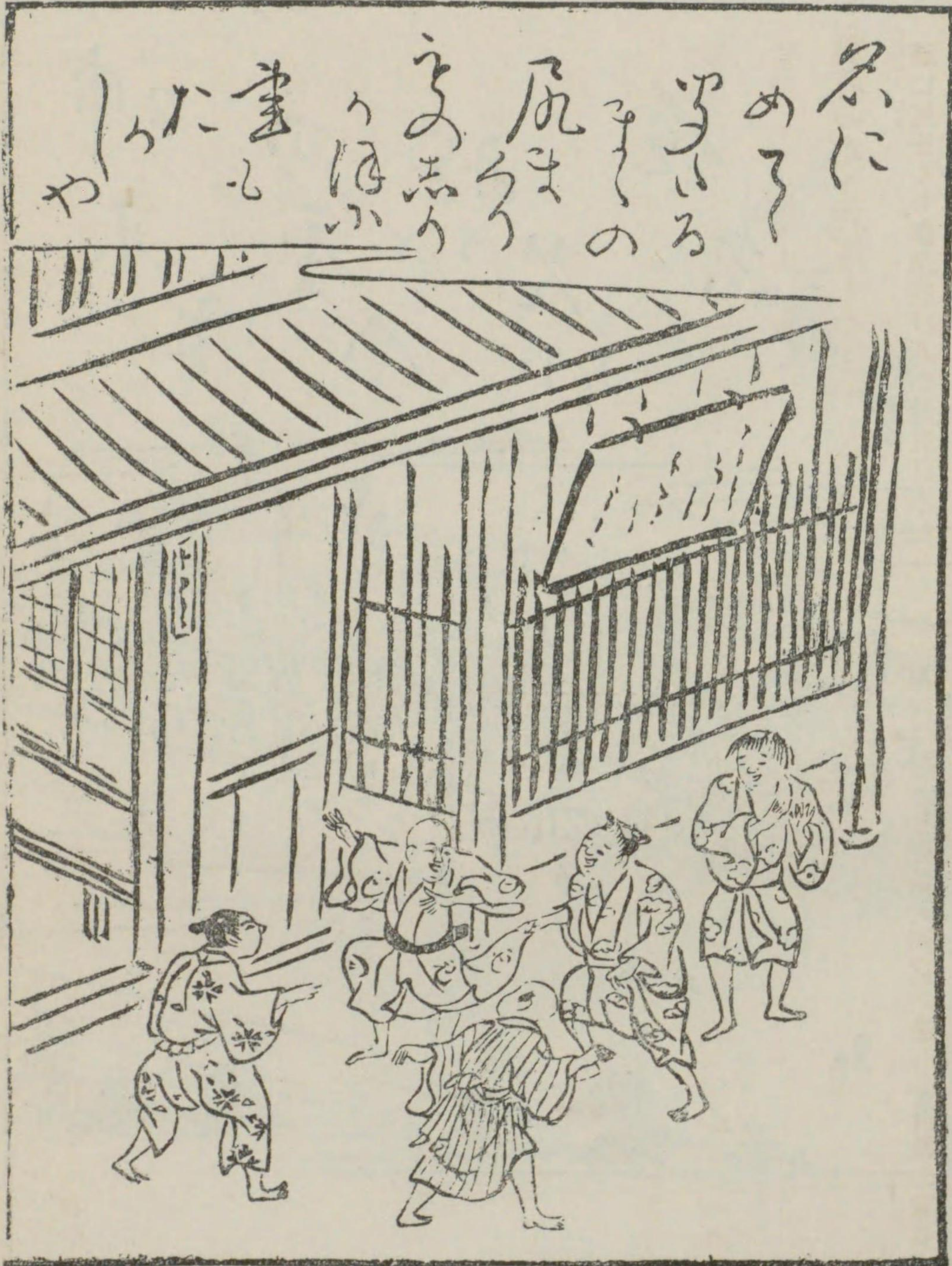
百廿六 元禄年中矢頭長助といふ義士あり始ハ梶原氏にて矢筈の紋所なり後主君の命によつて紋所を名字に矢

頭氏と改 大坂北邊に借宅をして病死す後高松の隠士河内正佳といふ人上福島淨祐寺に石碑を立る本

堂のうしろにあり

其むかし義心の重き石塔も今まのあたりてうすけて見る

百廿七 諺に尻まくり御法度けふハ廿五日とわらんへの遊言はむかし天満天神宮の邊りの百姓の家多くして町









家へすくなき時毎月廿五日の御縁日のへ百姓農業を休てる折に一軒にても農方へ出るに尻からける人を見つけるとやすみるる百姓より申やうに廿五日の休なるに尻まくるへ御法度しやといふて農方へ行をと、めしとぞ

百廿八

早春にへ初天神とて詣て来る諸人往來せましと押合ふありさま年毎にかへらぬ御神徳申も恐れあり御社内の小山やといへる茶店に腰をかけやすらふ中にも遊女多きに參詣も心迷ふそおかし、

のほりつめた客にひかれて坂町のおやまかたんと小山屋へよる

百廿九

近年御社内にあらたなる土堤に樹木四季のなかも盡せし

百卅

同土堤南の穴門の石に梅櫻松竹の文字をほりいれあり菅神御愛樹の名によりてや一説に此石へ青物市場の民家に年久しく有しを奉納せしともいふ

梅も飛のす櫻もかれす松竹もいはほとなりてあな貴とけれ

百卅一

御社内に開運の牛あり往昔土師連吾笥といふ人士器の細工人を山城の伏見村に住しめ稻荷山の三ツの峰の土をましへ今の代まで傳はりて伏見街道の土細工狐西行布袋牛品々の人形器物等造りて業となす事年久しき産物なり中にも牛の徳をかそふるに貴人高家に近くめされて御車の役をつとむ五條の橋の牛若丸へ名にあらはれ根來山に牛谷の名をのこす農作に百姓の肩を休めさんろへ腰を休む番匠へうし

ひきの上棟を祝しひく手あまたの牛はくろ牛市商人の牛のよたれを忘れす牛のふんをつくねたやうにくらかりからひきたす牛のねたほとかねをまうけなへ牛ぬす人にあへん九牛か一文商内早牛も遅牛もめくる車牛唐の人の牛洗ふよしあしはいはぬもつらしいふも牛へ牛つれうしの日祭七夕祭に心を清め干牛丸に病をはらひ牛瀧山におもてをてらし牡丹花の牛の角に箔をかざりうしと見しながら女のうしろ帯に心迷ひ丑の時参りの性悪に此世から牛となりうし鬼のせめをうけ牛にひかれて善光寺嵯峨に牛のけまんとおがまれ牛が哥よみ白太夫の牛の講釋を菅家に傳へ奉る今浪花の天満御社内に左り向のうしの開運の像あり

左りむきなつともつさしなれ石いはほとなりて開運のうし







# 京師浪花書林

寺町通五條  
殿  
六角通御幸町  
小川  
心齋橋北久大郎町  
柳原喜兵衛  
心齋橋安堂寺町  
田村九兵衛  
心齋橋鹽皿所  
玉置清七  
九條本田  
堀  
今橋三丁目  
陰山三郎兵衛

逢坂の清水(20……)  
安居の天神(27……)  
あやうまん院(35……)  
舍利寺(44……)  
霞松原(60……)  
阿部野王子(65……)  
新御靈(73……)  
座摩宮(81……)  
瓢箪町(88-89)  
四橋井阿彌陀池(95……)  
玉造稻荷(106……)  
遍明院(111……)  
專修院(117……)  
本覺寺(124……)

## 插圖目次

難波	京(14-15)	今宮	夷(18……)	逢坂の清水(20……)
松蟲	塚(21……)	一心	寺(22-23)	安居の天神(27……)
眞清	水(30-31)	大江	岸(32-33)	あやうまん院(35……)
天王	寺(33-41)	庚申	堂(43……)	舍利寺(44……)
住吉	吉(50-53)	津守	寺(58……)	霞松原(60……)
遠里	野(61……)	飛田	田(63……)	阿部野王子(65……)
小塚	塚(67……)	たみ	島(72……)	新御靈(73……)
難波	堂(74-75)	津村	の御堂(78-79)	座摩宮(81……)
稻荷	宮(83……)	鹽町	師(85……)	瓢箪町(88-89)
白髮町	堂(91……)	三津寺	八幡(93……)	四橋井阿彌陀池(95……)
道頓堀	堀(93-99)	千日寺	寺(100……)	玉造稻荷(106……)
森明神	神(108……)	國分寺	寺(110……)	遍明院(111……)
大蓮寺	寺(113……)	淨國寺	寺(114……)	專修院(117……)
生玉大明神	神(119……)	高津宮	宮(122……)	本覺寺(124……)



藤 棚 (126 ……)

籠岸井渡邊 (130 ……)

衢壤嶋井竹林寺 (139 ……)

天神御旅所 (144—145)

姫 嶋 (150 ……)

大融寺御幸 (158—159)

女 夫 池 (164 ……)

崇 禪 寺 (169 ……)

母 恩 寺 (175 ……)

水 様 (198—196)

天王寺太子堂御くう御鏡の事 (205)

住吉あをはの神事 (214 ……)

住吉あん宮寺やくし堂法事 (220)

さきてうのばの所 (225 ……)

あん清水のて (232 ……)

天王寺くわいろうの花見 (239 ……)

朝 日 宮 (127 ……)

難 波 嶋 (136 ……)

茨 住 吉 (141 ……)

野 田 藤 (147 ……)

曾 根 峯 (156 ……)

大融寺附神明 (161 ……)

鶯 塚 (166 ……)

長柄大願寺あと (171 ……)

天満宮附星合池 (176—177)

正月門々のかざり禮の所 (201 ……)

子供はねつき玉打所 (207 ……)

正月 七日 七草 (216 ……)

十日ゑびすの事 (222 ……)

住吉四社の御くう (230 ……)

天王寺涅槃會 (235 ……)

ひやうたんまち (242—243)

蠟燭町神明 (129 ……)

三 軒 屋 (137 ……)

龍溪禪師庵 (143 ……)

傳 法 (149 ……)

堂 嶋 (157 ……)

北 野 天 神 (163 ……)

長柄釋迦堂 (168 ……)

三 寶 寺 (173 ……)

東照權現宮 (179 ……)

住吉の神前御くうそのふる所 (203)

道頓堀初芝居 (210—211)

大ゆふ寺とみをつく事 (217 ……)

住吉の御弓の所 (223 ……)

ごりやうノ宮ノ所 (231 ……)

天王寺六字堂れんちのまら (237)

三月鳥合のて (244 ……)

住吉あほひのて (246 ……)

天わらじ金堂 (256 ……)

東照こんけんの社 (262—263)

あやうまんゐん (268 ……)

天神の御たび所 (274 ……)

たごりへ御せん (283 ……)

ぼ ん お ど り (290 ……)

しち〜の地藏ま (294 ……)

九月九日きく水ゑん事 (304—305)

住吉たからの市の所 (310 ……)

今 宮 の さ い 禮 (315 ……)

九月きくの花ゑん (324 ……)

西本願寺御佛事 (329 ……)

あんくらしの佛きやう (334 ……)

や ぐ ら や し き (406 ……)

有 馬 富 士 (412—413)

大師みゑいくの事 (248 ……)

玉作いなりの神事 (258 ……)

五月五日のちまき (265 ……)

大内かおやう (270 ……)

すみ 吉の神事 (276—277)

七夕のそなへ物之事 (286 ……)

東本願寺御とらう (292 ……)

三津寺八まんの神事 (297 ……)

生玉のまつりの所 (305 ……)

天王寺れいしんのまひの事 (312)

いなりの御かくらの所 (316 ……)

十月いのこの事 (326 ……)

天王寺さこの神ま (332 ……)

大内せつふんの事 (336—337)

座摩社并東本願寺穴門 (408—409)

京 大 文 字 火 (414—415)

かういあをばのすたれ (254—255)

住吉うの花ま (260 ……)

住吉御田 (267 ……)

やま 御はら (272 ……)

千日寺とらう事 (282 ……)

御 城 御 番 代 (288—289)

西本願寺御とらう (293 ……)

難波堀江月見 (299 ……)

高津の神前にてすまふ (308 ……)

らうそく町神明のさい禮 (313 ……)

天満天神の矢ぶ (318—319)

東本願寺御佛事 (328 ……)

からあん堂ゑん日の所 (333 ……)

浪 花 十 六 橋 (402—403)

京 橋 (410—411)

鯉塚の由來 (418 ……)



十三 開梅 (424-425)  
 道の邊の柳 (434……)  
 石の瓦 (441……)  
 今宮村 (454-455)  
 鮑貝の窓 (462……)  
 解船町の雪 (470-471)  
 玉江橋 (478-479)  
 雪鯨橋 (488-489)  
 手水鉢 (493……)  
 希代杉 (512……)  
 桃の花 (516-517)  
 石の鉦 (523……)  
 浪花の梅 (532……)  
 石燈籠 (535……)  
 笑鬼 (540……)  
 一目十景 (544-545)

貳 百 文 (438-429)  
 地藏堂と庚申塚 (437……)  
 鴈金文七の畫 (446……)  
 龍の石 (457……)  
 かまやの柳 (463……)  
 龜の松 (472-473)  
 とす 7 (480……)  
 長柄の橋板 (490-491)  
 大溝の中の額 (508-509)  
 八里半 (514……)  
 玉造高臺 (520-521)  
 相生松 (524……)  
 百足瓦 (533……)  
 高燈籠 (537……)  
 三味線塚 (541……)  
 琴塚 (548……)

短冊 塚 (432-433)  
 姉川新四郎櫻 (438-439)  
 芝居と南地の涼 (449-452)  
 相生の松 (458-459)  
 阿彌陀池 (464-465)  
 はだし藏 (474-475)  
 本庄の森松 (486-487)  
 長柄の橋杭 (492……)  
 初弘法のなげ橋 (515……)  
 小橋の松 (522……)  
 高津の雪 (530-31)  
 鬼の目な 7 (534……)  
 浅黄櫻 (538……)  
 月江寺 (542……)  
 清水寺 (551……)

佛足跡 (553……)  
 五葉松 (558……)  
 古物の手水鉢 (564……)  
 西行の畑 (570……)  
 柳の清水 (575……)  
 住吉祭 (580-581)  
 三尊佛 (587……)  
 天狗瓦 (594……)  
 豊崎宮 (598-599)  
 尻まくり (605……)

長石塔 (554……)  
 その女の店 (561……)  
 連理の樹 (565……)  
 浦嶋の子 (572……)  
 誓文の拂 (576-577)  
 蘆分橋 (582-583)  
 入内雀 (583……)  
 牡丹花 (596……)  
 鶴八幡宮 (601……)  
 新土堤 (606-607)

紙子佛 (556……)  
 ころや (563……)  
 楠の石燈籠 (569……)  
 難波の杜鵑花 (573……)  
 地藏祭 (579……)  
 香の梅 (585……)  
 大川納涼 (592-593)  
 三番萩 (597……)  
 野田の藤 (603……)



## 『山本洞雲』に就いて

地誌篇「其一」の中に収録しました『難波十二景』と『難波十観』との著者、山本洞雲に就いて、茲に未定稿ながら少しく其の傳記を書きよるして置きませう。

人名辭書や、諸家著述目録によりますと、

山本洞雲、京都の儒者なり、名は泰順、字は三徑、宇都宮由的に學ぶ、漢學を善くし、大極圖說諺解（四冊）、月令諺解（二冊）、和漢兩鏡錄（二冊）、節序詩集（十二冊）、四家絶句（四冊）、山城名所記洛陽名所集（十二冊）、和漢印盡（三冊）、三重韵首書（二冊）等の著あり

とあります。古版地誌解題六六頁には

山本泰順は狩野派の畫人友我是尙の子、京都の儒者にて字は三徑、號は洞雲と云ひ、又國風を下冷泉爲景に學べり

とございます。以上の外、洞雲の著書として知られてゐるものに、都物語（十一冊寛文九年板）老子諺解大成（五冊延寶九年板）があります。

從來、發表された洞雲の傳記として最も詳細なものは、森潤三郎氏が書かれた『洛陽名所集』とその著者とに就



きて』の一文でございます。それに依りますと、山本氏の系圖は次の通りです。

山本氏は清和源氏、新羅三郎義光の裔、義光の長子義業は佐竹氏の祖となり、義業の次子式部丞義定、近江國山本——現今の淺井郡朝日村——に居り、山本冠者と稱したのが、山本氏の祖である。義定の子兵衛尉義經、その子義弘と相繼ぎ、九代を経て從五位下佐渡守尙親に至り、文明年中、山城國愛宕郡岩倉郷に移る。尙親の孫對馬守資幹、資幹の子佐渡守尙利、尙利の子若狹守尙俊と相嗣いだが、尙俊の子修理大夫尙治は明智光秀に屬し、天正十年六月十三日、天王山に戦死した。この尙治の子彦五郎富尙、富尙の子は友我是尙、是尙の子は即ち我が山本洞雲である。

さて、洛陽名所集、卷の六、八幡山の條下に『——余いまだ二十に三をくはへし年——』の一節がありますのから推して、この書の序文を書かれた萬治元年（我が二三一八）（西曆一六五八）戊戌八月を以て、著者洞雲が二十三歳であつたとしますれば、その生年は寛永十三年（我が二二九六）（西曆一六三六）丙子に當り、難波十二景の開板された延寶四年（我が二三三六）（西曆一六八〇）庚申には四十五歳になつてゐる筈です。

所で、同じ著者の筆に成つた、和漢兩鏡錄——貞享三年（我が二三四七）（西曆一六八七）丙寅の開板——の序文の末に『延寶別杖、春、三月、端五浪速教授梅室叟、山本洞雲編』とあります。この廿一字のうち、別杖の二字は、干支の異名にもなさうですから、推測を下しますと、『別』は『捌』即ち『八』と解し得らるべく、『杖』の字は、『杖家』とつゞいて五十

歳、『杖朝』とつゞいて八十歳を意味しますから、『杖』を『年』といふ義に解しますと、『別杖』は『八年』となりますが、さて『梅室叟』とある『叟』の字が年齢に比して妥當でないとおもはれて來ます。換言しますと、當時四十五歳であつた筈の洞雲が、『としより』また『おきな』といふ意味の『叟』の字を書いてゐるのに疑ひが挟まれないではありません。まかし早熟であつた斯人が、早く自ら老人の列に入るとの意で、この字を用ゐたものか、それともまた寛永十三年の生れといふことが誤つてゐるのでせうか。これは更に後日の研究に譲ります。

森氏の文に依りますと、山本氏の宗家は京都府愛宕郡岩倉村に現存し、我が洞雲の後には江州に残つてゐるさうですが、延寶四年に四十一歳であつたと推定される洞雲が、難波十二景の末文に隨分永らく浪速に住んでゐるかの如く書いてゐるのから見まして、三十歳前後で大坂に來たのではないかと思はれます。大坂の北草屋町に住んでゐた我が山本洞雲は、越鳥は南枝に、胡馬は北風に、の譬へで、五十歳前後に、故郷戀しく、祖先の發祥地たる江州山本へ隠れ、そこで終つたのではないでせうか。

附記。この『山本洞雲』に就いての一文、材料は凡て鹿田文一郎氏の提供されたもの、予は唯だその材料に

よりに、臆測し、推定して、この稿を綴りました。茲に氏の好意を深く感謝する次第です。（昭和

丁卯七月九日夜、船越政一郎記）



所收圖撰出の辯

佐古慶三

商都大阪の史的考察<sup>1)</sup>が撰者のレーベンス・ウエルクである。にも不拘、地誌<sup>2)</sup>・地圖以下の稽查、年表<sup>3)</sup>・役録<sup>4)</sup>以下の編纂などの邪道に往々迷ひ込むのは、畢竟するに郷土史研究上に於る基礎的缺陷を、多少とも補充せんとする微衷に外ならぬ。今、誤つて専攻外の古地圖撰出の倚賴を受けるのも、恐らくかゝる弄戯が機縁となつたのであらう。

元來撰者に取て關心なのは古地圖の史料的價值である。即ち町名・町位・町域を知るの方便如何さ云ふ問題である。されば何等地圖學の素養を持たぬ撰者には、地圖其自體の本質的研究―例へば方位・縮尺・圖式・圖法上の變遷―は、始から目的とするところではない。既往數次、開陳した卑見<sup>5)</sup>は悉く古坂大坂圖の史料的價值拒否論に終始する。古地圖の史料的價值が極めて低いものであることの纒説は、他の拙稿に一切譲つて置くが、尙唯單に地圖上の記載を以て町名<sup>6)</sup>・町位<sup>7)</sup>・町域<sup>8)</sup>を云爲



せられるのを屢々看聞する。で其内史料的價值拒否に關する積極的立言<sup>9)</sup>を以て、徹底的な啓蒙運動を起さうと思ふ。

今浪速叢書の要求を聞くに、地誌其他所收書の参照上地圖をも加へるこゝ、恰も町鑑を載せるの主旨を同くし、以て大阪地理の手引とあるとこのこゝ。そして右撰出條件として(1)校訂を施さないで済むこと(2)縮圖の簡易なること(3)地誌との連絡を考慮することを挙げられる。で先づ史料的價值の多少も高いものを檢出するに、

- は、10) 元祿 小 少彩 三種
- に、貞享—元祿 中 多彩 一〇種
- ほ、元祿—享保 中 多彩 一一種
- と、寶曆 中 少彩 四種
- を、文化—天保 大 少彩 二種

其中、少彩であつて縮寫の簡易なるものは(こ)を抽出したる後、地圖が表示してゐる年代の配置をば考慮して

はノ一 天和・貞享の大阪(アンダー・エイヂ)

とノ三 寶曆の大阪(ゴールデン・エイヂ)

をノ二 天保の大阪(シルバー・エイヂ)

右三者を推薦する。

尙各圖の題額・題簽・板行・書林・作者・文幅・序跋・附言・附録・附圖・凡例・備考・背書・補訂・誤脱並に按文に就ては、拙書・解説二一頁以下、五〇頁以下、七二頁以下をば參看せられたる。

古地圖の史料的價值に關する質疑は、近時古板京都圖の研究に依るも同一の結果を齎らす。文化の中心であつた洛中の職業的製圖家は、京洛の地圖さへも不眞面目に取扱つてゐるのを確め得た。で折角三浦先生から嘗て賜つた忠言<sup>11)</sup>も、これで全然反古となる。町鑑も亦地圖と同様であるこゝは、既に他の機會に於て論破したところ。<sup>12)</sup>かくして地圖・町鑑に失望せる筆者は、發心して眞正圖の復元を企劃する<sup>13)</sup>のである。

〔註〕(1)「拙著 佐賀藩藏屋敷拂米制度

(2)「拙書 難波雀類書考



- (3) 「拙書 大阪年表」
- (4) 「拙書 大阪歴代役人録」
- (5) 「拙書」古板大坂地圖解説○「同」古板大坂地圖聚成解説○「同」明曆三年板新板大坂之圖解説○「拙文」拙書古板大坂地圖解説に就て樋口氏に答ふ(希有一輯)○「同」貞享四年板大坂大繪圖の現出に就て岩橋・樋口兩氏に答ふ(書物禮讚二冊)
- (6) 「木村博士」九郎右衛門町の名稱に就て(大大阪三卷四號)
- (7) 大阪市史第一。三一五——三一六頁
- (8) 浪速叢書第一。濱松歌國傳
- (9) 「拙著」大阪古町索引
- (10) 前掲解説に於る分類に従ふ。
- (11) 前掲解説三浦博士序文
- (12) 「拙書」大阪町鑑考
- (13) 「拙著」大阪古町圖説

(に・お・に・け)

昭和二年六月十五日印刷  
昭和二年六月二十日發行

(非賣品)

浪速叢書  
不許  
複製  
第二十第

編纂校訂者 船越政一郎  
大阪市西成區松原通二丁目四三

發行者 江崎政忠  
大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五

印刷者 長谷川泰三  
大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五

印刷所 桃谷印刷株式會社  
電話南 三〇六二番  
三七二二番

發行所 浪速叢書刊行會  
大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内  
電話土佐堀六六二二番  
振替口座大阪七七三六三番



一 本叢書は我等が愛するこの『大阪のため』に生れたのです。元和以降この浪速に關する編著記録のうちから、過去の浪速文化を回顧せしめ、未來の浪速文化を生ましむべき、眞に永遠の價値あるもの——中には未刊行のものが大部分を占めてゐます——を收め、後の世に傳へたい希望の下に着手されたものです。

一 本叢書の題字は、帝室御物聖德太子御筆『法華經義疏』の寫眞のうちから求め出したものです。我國に於ける文化工藝の祖におはすばかりか荒陵山四天王寺の創建者として我が浪速との因縁が頗る深い太子の御筆蹟を、我が叢書の題字とすることを得たのは、本會の誇りと考へてゐます。

一 本叢書は原本の插圖を一枚も省略せず、力めて原本の面影を傳へたいと心がけてゐます。

一 本叢書の用紙は王子製紙株式會社の別漉紙で、成るべく讀者の眼の疲勞を軽減したい用意が籠つてゐます。

一 本叢書の組版印刷製本これらの技術は桃谷印刷株式會社が其の一切を擔任し、及ぶ限りの努力を惜しまないとの意氣です。

一 本叢書見返しの畫は、日本畫壇の異彩菅楯彦氏の筆。表紙の布は、我國織物界の偉材龍村平藏氏の意匠に成つたもので、現に我が讀書界に好評噴々たるものがございます。

一 本叢書刊行會の理事は伊藤秀雄、林安繁、堀越壽助、室谷鐵腸、小林利昌、江崎政忠、木間瀬策三、森下博、末吉一郎の諸氏。顧問は今井貫一、和田萬吉、幸田成友、内藤虎次郎、内田貢、黑板勝美、藤井乙男、新村出、關一の諸氏。相談役は石割松太郎、橋本耕之介、南木芳太郎、上松寅三、佐古慶三、三宅吉之助の諸氏です。(諸氏の姓名はいづれもいろは順による)



1520-14

目錄  
C

浪速叢書

(全拾六卷)

所收目錄

第一	攝陽奇觀	第九	大阪商業史資料
第二	攝陽奇觀	第十	大阪訪碑錄
第三	攝陽奇觀	第十一	大阪訪碑錄
第四	攝陽奇觀	第十二	地誌
第五	攝陽奇觀	第十三	地誌
第六	攝津名所圖會大成	第十四	風俗
第七	攝津名所圖會大成	第十五	演藝
第八	攝津名所圖會大成	第十六	索引

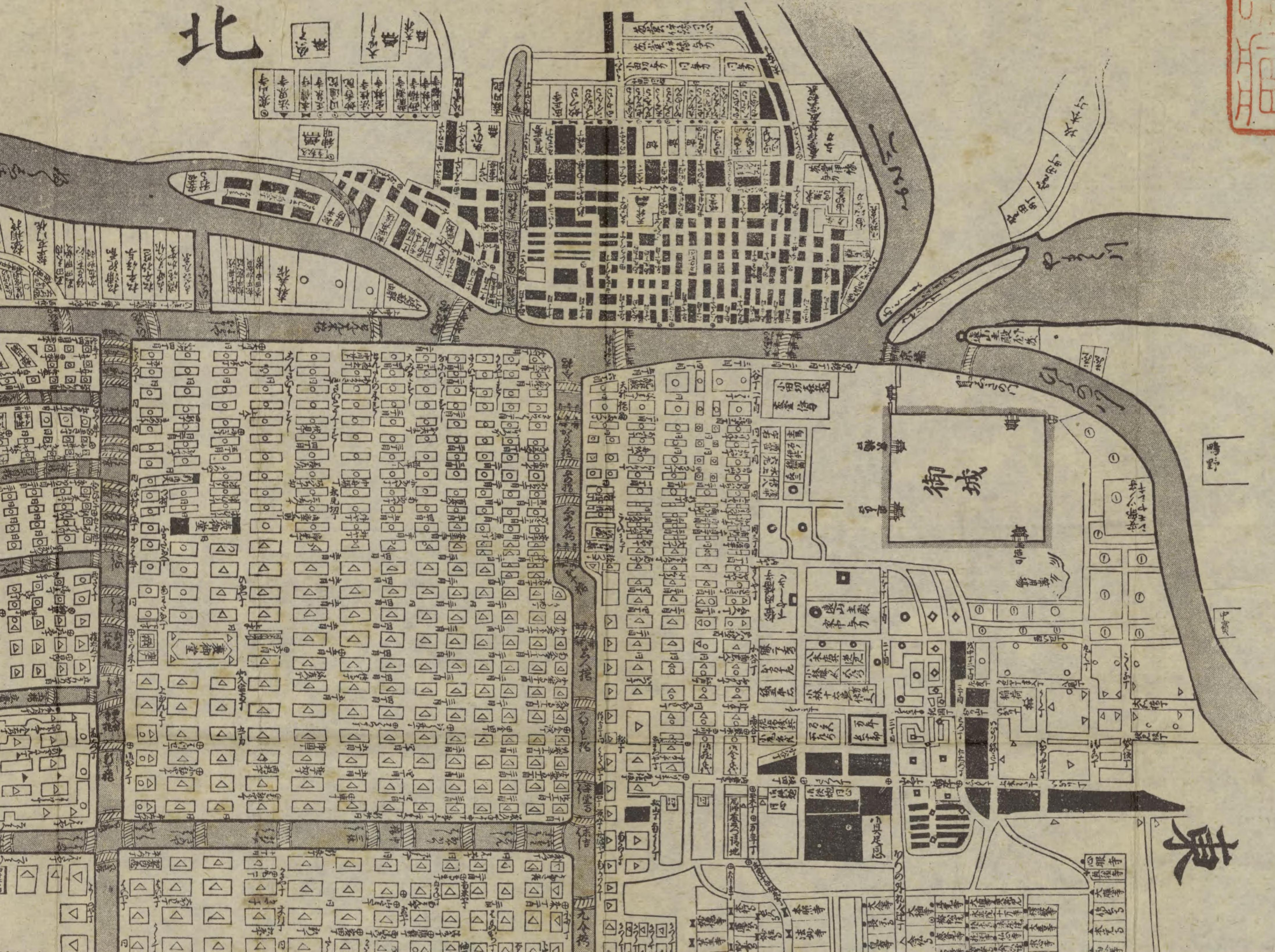




辰 歲

# 増補大坂圖

この圖は元祿年間刊行の圖で、原圖には、此の所に此の増補大坂圖の文字はありませんが、下に示す攝津大坂畫圖との對照上、かく書入れることに致しました。猶此の原圖は、上を東としてゐますが、茲には北を上にして製版印刷に附したこと。及び兩國共に原圖の四分の一大であることを申添へておきます。











此の所に此の増補大坂圖の文字はありませんが、下に示す  
ことに致しました。猶此の原圖は、上を東としてゐますが、茲に  
この兩圖共に原圖の四分の一大であることを申添へておきます。



南

東

- ⊕ 合級 天台宗
- ⊗ 合級 日蓮宗
- ⊙ 合級 禅宗
- 合級 淨土宗 普賢院流
- ▲ 合級 日 百萬遍流
- △ 合級 日
- 合級 天台宗 天石宗

天王寺

花陵山

天王寺  
花陵山

屋火

屋火

下石

下石

下石

下石

下石

下石





西

東

- ⊕ 御城代同家来屋敷
- 京橋口御定番同与力同心家来屋敷
- 延寶九年改町名
- △ 合紋 南組
- 合紋 北組
- ◻ 合紋 天台宗
- ▲ 合紋 淨土宗 普賢院流
- ∧ 合紋 日 百万遍流
- ◻ 合紋 天台宗 志行流
- ⊕ 合紋 夫言宗
- ◻ 合紋 日蓮宗
- 合紋 禪宗

火屋

技木場

村邊渡

御城代

御定番

御同心

御定番

御同心

御定番

御同心

御定番

御同心

御定番

御同心



# 攝州大坂圖

北











東

御城

東小橋村

木野村

田村

田村

小橋村

難波村

木津村

御藏

難波村田地

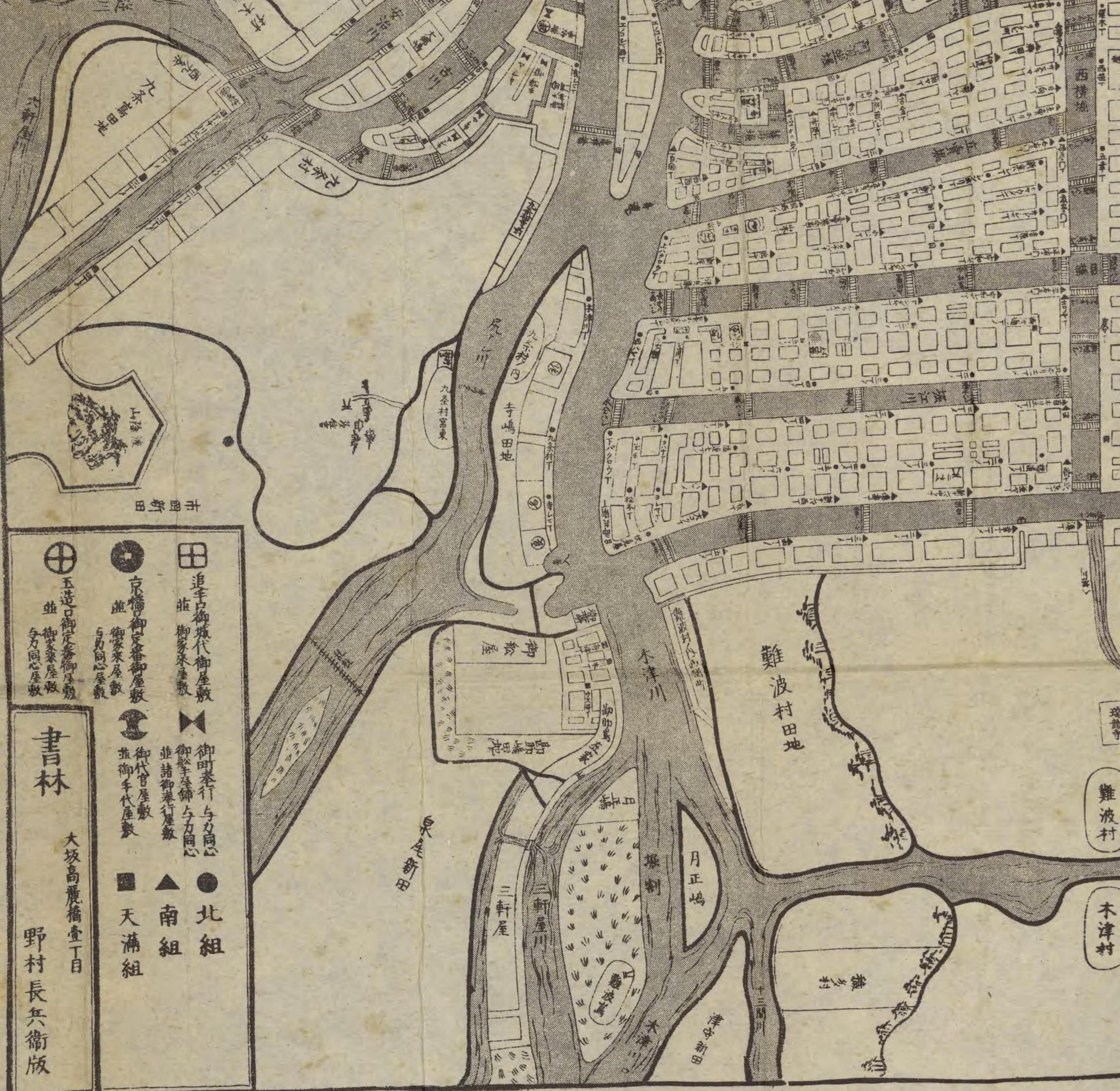












大坂御藏屋敷所附 合支

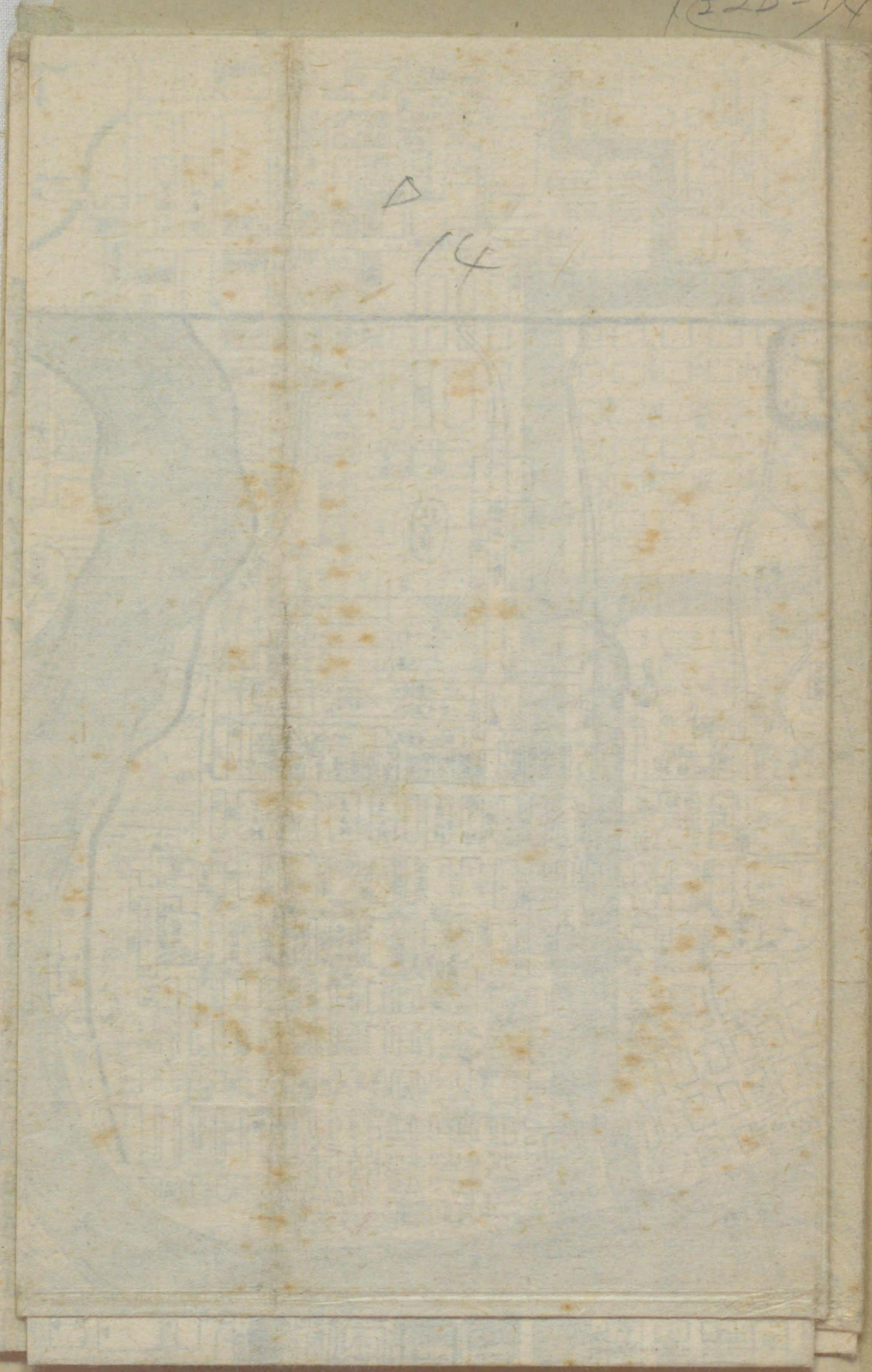
1 美濃加賀	10 伊州長洲	19 伊州長洲	28 伊州長洲	37 伊州長洲	46 伊州長洲	55 伊州長洲	64 伊州長洲	73 伊州長洲	82 伊州長洲	91 伊州長洲	100 伊州長洲
2 美濃加賀	11 伊州長洲	20 伊州長洲	29 伊州長洲	38 伊州長洲	47 伊州長洲	56 伊州長洲	65 伊州長洲	74 伊州長洲	83 伊州長洲	92 伊州長洲	101 伊州長洲
3 美濃加賀	12 伊州長洲	21 伊州長洲	30 伊州長洲	39 伊州長洲	48 伊州長洲	57 伊州長洲	66 伊州長洲	75 伊州長洲	84 伊州長洲	93 伊州長洲	102 伊州長洲
4 美濃加賀	13 伊州長洲	22 伊州長洲	31 伊州長洲	40 伊州長洲	49 伊州長洲	58 伊州長洲	67 伊州長洲	76 伊州長洲	85 伊州長洲	94 伊州長洲	103 伊州長洲
5 美濃加賀	14 伊州長洲	23 伊州長洲	32 伊州長洲	41 伊州長洲	50 伊州長洲	59 伊州長洲	68 伊州長洲	77 伊州長洲	86 伊州長洲	95 伊州長洲	104 伊州長洲
6 美濃加賀	15 伊州長洲	24 伊州長洲	33 伊州長洲	42 伊州長洲	51 伊州長洲	60 伊州長洲	69 伊州長洲	78 伊州長洲	87 伊州長洲	96 伊州長洲	105 伊州長洲
7 美濃加賀	16 伊州長洲	25 伊州長洲	34 伊州長洲	43 伊州長洲	52 伊州長洲	61 伊州長洲	70 伊州長洲	79 伊州長洲	88 伊州長洲	97 伊州長洲	106 伊州長洲
8 美濃加賀	17 伊州長洲	26 伊州長洲	35 伊州長洲	44 伊州長洲	53 伊州長洲	62 伊州長洲	71 伊州長洲	80 伊州長洲	89 伊州長洲	98 伊州長洲	107 伊州長洲
9 美濃加賀	18 伊州長洲	27 伊州長洲	36 伊州長洲	45 伊州長洲	54 伊州長洲	63 伊州長洲	72 伊州長洲	81 伊州長洲	90 伊州長洲	99 伊州長洲	108 伊州長洲

浪速叢書(第十二) 一 地誌「其一」 一 附錄  
浪速叢書刊行會發行



1520-14

△  
14





KI-2D-14

554  
128



春



